

論文審査及び最終試験又は学力の確認の結果の要旨

<p>①・乙</p>	<p>氏名</p>	<p>小林 祥也</p>
<p>学位論文名</p>	<p>Use of Anticoagulants or Antiplatelet Agents is not Related to Epistaxis in Patients Undergoing Transnasal Endoscopy</p>	
<p>学位論文審査委員</p>	<p>主査 副査 副査</p>	<p>川内 秀之 磯部 威 藤代 浩史</p>



学位論文の要旨

日本発の経鼻上部消化管内視鏡検査は、従来行われてきた経口法に比べ、被験者の咽頭反射が少なく、息苦しさなどの苦痛が少ない点で、忍容性の高い方法として評価されている。一方で、特有な偶発症として頻度は少ないものの鼻出血の危険がある。

申請者は、今回の臨床研究において、経鼻上部消化管内視鏡検査時の鼻出血の頻度と鼻出血を起こす危険因子について、詳細に検討した。さらに、抗血栓療法の有無と検査時の鼻出血の関連性についても検討した。

本研究は、2014年4月から2015年3月まで出雲市立総合医療センターにて経鼻上部消化管内視鏡検査を受けた6860名(男性3405名、女性3455名、平均年齢55.6歳)を対象とした。内視鏡検査は外径の異なる2種類(5.5mm, 5.9mm)を使用し、検査前の前処置は全例同じ方法で行い、内視鏡抜去時に鼻出血の有無を評価した。

その結果、鼻出血率は3.6%(245/6860)で、男性2.3%、女性4.8%と女性に有意に高かった。内視鏡外径の大きさでは鼻出血率に差はなく、平均年齢は鼻出血を認めた群(49.3歳)が認めなかった群(55.8歳)に比べ有意に低かった。抗血栓療法を受けている患者の割合は3.4%(233/6860)で、鼻出血率は抗血栓療法を受けている群(3.0%)と受けていない群(3.6%)の間に有意差はなかった。多変量解析の結果、女性と65歳以下の若年者が鼻出血を起こす有意な因子であることが判明した。今回の結果から、鼻出血は若年者や女性に多く、抗血栓療法は鼻出血を来す危険因子とはならなかった。

本研究は、国内外の経鼻上部消化管内視鏡検査の普及に多大なる貢献をする有意義な研究である。

最終試験または学力の確認の結果の要旨

本研究は、経鼻上部消化管内視鏡検査の偶発症である鼻出血について種々の背景因子をもとに検討した点で独創的であり、国内外の経鼻上部消化管内視鏡検査の普及に多大なる貢献をする有意義な研究である。申請者の本領域の知識も十分であり、本学の学位授与に値する。(主査 川内秀之)

経鼻上部消化管内視鏡検査時の合併症である鼻出血の危険因子として、近年使用頻度が増加している経口抗凝固薬が与える影響が少ないことを明らかとした。臨床現場への応用が期待される研究であり、関連知識も豊富で質疑応答も的確なため、学位授与に値するものと判断した。(副査 磯部 威)

本研究は本邦で広く普及している経鼻上部消化管内視鏡検査の主たる合併症である鼻出血に対して、特に抗血栓薬との関連性も含めた詳細な検討がなされており、非常に臨床的意義の高いものである。申請者は本領域の知識も豊富であり、学位授与に値すると判断する。(副査 藤代浩史)